

消費者の食品安全に対する情報ニーズの心理学的構造の解明 — 共分散構造分析を用いた因果パスの検証 —

大阪大学大学院工学研究科 畑田 智彦・山口 治子・東海 明宏

1. はじめに

食の安全に関するリスクコミュニケーションでは、専門家が消費者の求めているリスク情報を提供することが、消費者の不安を取り除くために重要な役割を果たす。しかし、食の安全に関わるリスク研究において、リスク情報に対する情報ニーズの研究は進んでいない。そこで、本研究では、共分散構造分析を用い、消費者の食品安全に対する情報ニーズの心理学的要因の因果構造を明らかにすることを目的とする。

2. 研究手順

1) 仮説モデルの構築

山口 (2014) [1] を参考に、リスク認知とリスク情報処理過程の既存研究を整理し、消費者の情報ニーズの心理学的構造を表す仮説モデルを構築した。本研究で用いた仮説モデルを図 1 に示す。図 1 に示すように、Griffin et al. (1999) [2] によるリスク情報処理過程モデル (RISP モデル) をベースに、Slovic et al. (1980) [3] の分析枠組みにお

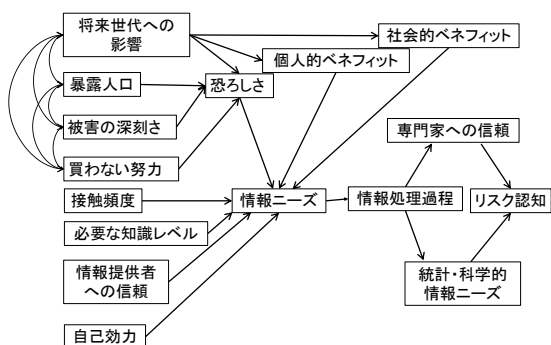


図 1 食品安全に対する消費者の情報ニーズの心理学的構造の仮説モデル

けるリスク認知とベネフィット認知の変数を加えた。仮説モデルの観測変数は 16 となった。ここで、自己効力は“自分自身が情報を処理する能力があると認識している心理的状态”を意味する。

2) アンケート調査の実施

仮説モデルの検証のためにアンケート調査を実施した。アンケート調査の内容を次に示す。

- ・配布先：大阪府、三重県に住む女性
- ・実施期間：2013 年 12 月から 2014 年 1 月
- ・アンケート形式：直接配布・回収
- ・有効回答数：121 通 (回収率 81%)
- ・対象ハザード：放射線の影響が懸念される食品 (以下、放射線)、食品添加物、遺伝子組み換え食品

3) 共分散構造分析を用いた仮説モデルの検証

共分散構造分析は統計解析ソフト SPSS AMOS を用いて行った。また、p 値による仮説検定により仮説モデルの検証を行った。さらに、ハザード間比較により、情報ニーズに寄与する変数を特定した。

3. 結果

図 2 に結果を示す。数値はハザードごとのパス係数である。いくつかの変数において、 $p < 0.05$ の有意水準で仮説を支持するパス関係と相関関係を得ることができた。3 つのハザードに共通して、「将来世代への影響」、「暴露人口」、「被害の深刻さ」、「買わない努力」の 4 つの変数間に正の相関関係があることが示された。さらに、「被害の深刻さ」から「恐ろしさ」に正のパスを持つことが導出された。また、「必要な知識レベル」から「情報ニーズ」に正のパスがあることが導き出された。

ハザード間で異なる点は、放射線の場合に、「自己効力」から「情報ニーズ」に正のパスが得られた。また、添加物の場合に、「個人的ベネフィット」から「情報ニーズ」に負のパス、「ハザードへの接触頻度」から「情報ニーズ」に正のパスが得られた。また、遺伝子組み換え食品では、「将来世代への影響」から「個人的ベネフィット」、および、「社会的ベネフィット」から「情報ニーズ」へ負のパス、「個人的ベネフィット」から「情報ニーズ」へ正のパスが得られた。

4. 結論と考察

リスク情報処理過程モデルの枠組みにおいては、Trumbo (1999) [4] による研究結果と同様に、「必要な知識レベル」から「情報ニーズ」へのパスが統計的に有意に特定された。この結果より、食品安全におけるリスクコミュニケーションにおいて、「必要な知識レベル」が高くなるほど「情報ニーズ」が大きくなることが示された。「必要な知識レベル」は消費者のリテラシーに影響を受けると考えられるため、消費者のリテラシーの向上により、「情報ニーズ」が変化することが示された。また、「個人的・社会的ベネフィット」、「恐ろしさ」、「自己効力」から「情報ニーズ」へのパスがハザードごとで異なることが示された。放射線では個人の情報処理能力をあげること、添加物では個人的ベネフィットを伝えることで、情報ニーズが大きくなることを示された。これは、知覚されているハ

ザード特性だけでなく、自分自身で情報を処理できるという認識(自己効力)が、ハザードごとに、情報ニーズに異なる影響を与えることを示している。これらの点については心理的な深層部分を分析することが必要であると考えられる。また、本研究で用いた仮説モデルの観測変数以外を、潜在変数として設定した解析を行うことが今後の課題となる。

参考文献

- [1] 山口治子「リスク情報処理過程における「情報ニーズ」の理論的基盤の構築」、2014、環境情報科学 (印刷中)。
- [2] Griffin, R. J., Dunwoody, S. and Neuwirth, K. "Processing model of the relationship of risk information seeking and processing to the development of preventive behaviors", *Environmental Research*, 2003, Section A 80, pp230-245.
- [3] Slovic, P., Fischhoff, B. and Lichtenstein, S. "Facts and fears: understanding perceived risk", In, *Societal risk assessment: General motors research laboratories*, 1980, pp181-216.
- [4] Trumbo, C. W. "Heuristic - systematic information processing and risk judgment", *Risk Analysis*, 1999, Vol.19 (3), pp391-400.

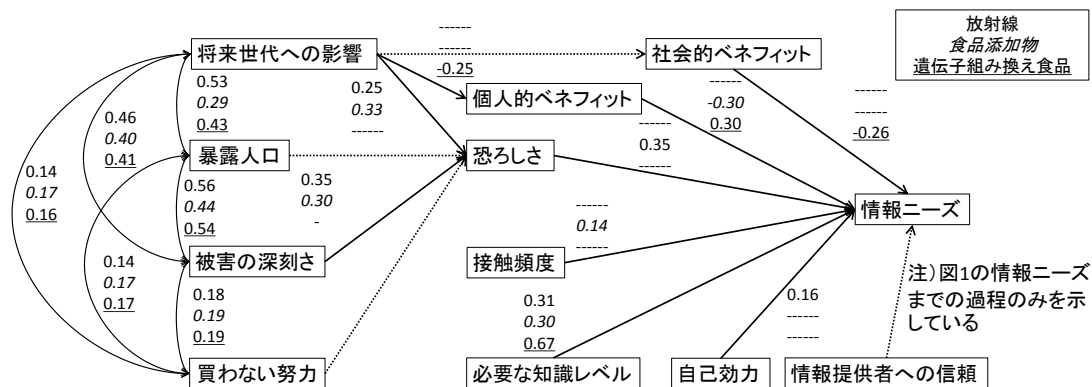


図2 食品安全に対する消費者の情報ニーズの心理学的構造：仮説モデルの検証結果